

大学(美術教育講座)と附属学校(図工・美術科)の連携による授業実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有川, 貴子, 山本, 剛土, 土肥, 正通, 白井, 嘉尚, 伊藤, 文彦, 川原崎, 知洋, 芳賀, 正之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008945

大学（美術教育講座）と附属学校（図工・美術科）の連携による授業実践

有川 貴子*

山本 剛士**

土肥 正通**

白井 嘉尚***

伊藤 文彦***

川原崎 知洋***

芳賀 正之***

1. 地域に目を向けた大学と附属学校の連携

教員養成大学・教育学部及び附属学校は、社会の変化や子どもの姿を捉えながら教育内容や指導法を検討し、新たな教材を考案しつつ、地域の学校現場の実践を様々な方面から支えている。これまで静岡大学教育学部美術教育講座（以下、美術教育講座）では、美術教育実践の場を柱に教科専門と教科教育との連携をより緊密なものにし、大学の研究成果や各附属学校（附属静岡小学校、附属静岡中学校、附属島田中学校、附属浜松小学校、附属浜松中学校）との共同研究の成果を地域の教育の活性化に繋げてきた。2004年より美術教育講座が意欲的に作成・発行し続けてきた研究誌『図工・美術授業研究 FILE』シリーズは、美術教育実践研究の交流及び情報発信の場を担い、多くの成果を得てきたといえよう。

ところで、美術教育講座と附属学校との連携に基づく研究は、魅力的な授業を展開するための教材開発に重点が置かれていた。こうした共通の視点からはじめられたものの、今では『FILE』作成を重ねるごとに、地域に貢献できる美術教育のあり方の検討にまで繋がっていくことができたといえよう。教員養成においてその役割を果たすべく、今後も『FILE』を通じた研究を推進していく中で、今日的美術教育の可能性を追いながら、地域に根ざした美術教育実践に励んでいきたいと考えている。

現在、学校現場では新学習指導要領（平成20年改訂）のもとに、社会の変化や子どもの姿を捉えながら教育内容や指導法を検討し、新たな教材開発を試み、様々な実践を試みている。図画工作・美術の授業をよりよいものにしていくためには、子どもたちが「美術を学ぶこと」の意味や「生涯に渡って美術に関わっていくこと」の大切さを考える必要がある。

このことを踏まえながら、本論では、平成25年度及

*静岡大学教育学部附属浜松小学校

**静岡大学教育学部附属静岡中学校

***静岡大学教育学部

び26年度における大学（美術教育講座）と附属（図工・美術科）との連携に基づく実践の取り組みについて報告する。

2. 〈広がれ、ぼくらの生命の木〜クリムト「生命の木」から〉（附属浜松小学校の授業実践と研究）

(1) 表現活動と鑑賞活動をつなげる実践

小学校の6年間は、子どもにとって心身ともにめまぐるしい発達を迎える時期である。自我や、他者とのかわりに対する感覚が発達し、自分や仲間と向かい合うようになるこの年代の子どもたちに、基礎的な造形技能を培うことのほかに、私たち教師は、この教科を通じて、豊かな情操を養うことを忘れてはならない。

生活に生きる技能の習得だけでなく、美しいものを美しいと感じ、多様な表現を楽しむことができるやわらかな感性を育てることは、子どもが自己を確立していくとき、自分がかけがえのない存在であるという自信をもてることや、同じものに出会っても、人によって感じ方や考え方が異なることを受け入れ、違いを拒絶するのではなく、時には試行錯誤する中で、それらを楽しみながら皆で生きていこうとする態度を育てていくことにもつながっていく。また、そのような感性を育む取り組みを繰り返していくことで、子どもに豊かな情操が養われていくと考える。

子どもの感性にはたらきかけようとするとき、「感じること」へのアプローチは欠くことができない。「感じること」を学ぶとき、大きな役割を担うのは鑑賞活動である。様々な対象や形態の鑑賞活動を行い、「感じること」の体験をする場面を設ける。色や形、構成などを視点に、言語を媒介として書き表したり、教師や仲間と対話したりすることで、子どもの感性はより磨かれていく。

また、「感じること」は、鑑賞活動のみにおいて体験するものではない。表現活動において、素材に五感をはたらかせてかかわる瞬間、思いと向かい合って試行錯誤する瞬間にも、子どもの心は揺さぶられ、「感じること」が多くあるはずである。その揺さぶりは、も

っと美しく、思いのままに表せるようになりたいという、造形技能への意欲を生む。よって、表現活動と鑑賞活動がつながるような単元展開を考えた。それぞれの場面で「感じること」が相互に作用し合い、より学びが豊かになっていく。

表現活動と鑑賞活動をつなげ、「感じること」を大切にしていこうとすることで子どもの感性を磨き、子どもが思いきり表すことを楽しみ、つくり出す喜びを味わうことのできる授業を目指している。



クリムト「生命の木」の対話型鑑賞より

(2) 授業実践

『広がれ、ぼくらの生命の木～クリムト「生命の木」から～』と題し、鑑賞活動と、素材体験をもとにした表現活動とをつなぐ学習を目指して3年生で実践を行った。

①単元の流れ

本単元では、クリムトの作品の対話型鑑賞をしたり、本物の木や、本テーマに沿った物語に触れたりする活動を通して「生命」や「木」へのイメージをもたせ、子どもがグループの仲間と言語を介してかかわり合いながらグループのテーマを決め、感じたことから生まれた思いを大切に表現活動に取り組みさせる。そして、できあがった自分たちの作品の並べ方を考え、美術展を開くことをゴールとして設定したいと考えた。

②第1時

まず、出会いの場面では、クリムトの「生命の木」を工作室の壁一面の大きさにしたものを掲示し、対話型による鑑賞活動を行った。教室に入って、子どもはその絵の大きさと、うずまきの形状が連なった枝の样に驚いたようで、すぐに、「これは何」「木じゃないの」「じゃあ、このぐるぐるは、枝かな」「女の人がいるよ」などと、口々に絵の感想を語り始めた。描かれているものをじっくりと観察する時間をとった後、教師がファシリテーター役となり、子どもに絵について

語らせていった。「目玉みたいなものは、きのこかな」「宝箱だよ」「ぼくは、マンションだと思ったよ」「じゃあ、近くにある緑色のはそりで、住んでいる小人が使うのかもしれないね」「木の枝のうずまきは、1学期に観たゴッホと同じだね」「うずまきはつながっているよ」「あの女の人は、おしゃれをしているね」「髪型を整えているんだよ」「踊りをおどっているんじゃないかな」子どもは、教師が想定した以上に、描かれているものや形から、様々な物語を想像していることが分かった。

③第2時

当初は、クリムトのうずまき型の枝を模倣するような表現活動を想定していたが、対話型鑑賞の授業アセスメントを経て、子どもに、グループでそれぞれのコンセプトをもたせ、小学校3年生なりの「生命の木」を描かせたいと考えた。そこで、アイデアスケッチを描く段階では、道徳の授業とも関連させ、「いのちのまつり ヌチヌグスージ」と「葉っぱのフレディ～いのちの旅～」の2冊の絵本を教材に、子どもに「生命」について考える機会を設けた。また、学校敷地内の森に出掛け、実際に木に触れたり、見上げたりする時間も設けた。そして、自分が感じたことをもとにグループでコンセプトを話し合い、一つに絞らせ、イメージに合う幹や枝をスケッチさせた。アイデアスケッチから、子どもが物語から「生命はつながっている」ことや「生命は変化していくこと」を発想したことや、木に触れたときのごつごつした感触や苔むした老木の色合いなどに覚えた感動などを見取ることができた。

④第3、4時

次に、各グループのアイデアスケッチに沿って、絵の具で幹を描かせた。大きな画面にダイナミックに描くことができるよう、筆だけでなく、手も使って描くことを演示して見せた。班で考えたコンセプトを大切に表現するよう伝え、アイデアスケッチを見ながら、使う色や、手や筆での描き方をよく話し合いながら描いていた。

⑤第5、6時

その後、第5、6時では、絵の具で描いた幹から、様々な種類の紙に、イメージに合う表現になるよう工夫をして枝を伸ばしていく活動を行った。

表現をする中で出てくる迷いや困っていることについて、全体で話し合う場面を山場に想定した。くると回転しながら伸びる枝を表現したいA女のグループは、数種類の紙テープを選び、ねじってみたものの、

どのように貼り付けていけば、思い描いた幹が広げられるか悩んでいた。全体にそのことを話したところ、B男が、「輪っかにしてとめたらいいよ」と提案した。すると、C男が、「ぼくの班の作り方と似ているよ。ぼくの班は、枝のリアルな感じを出したいから、ひねったところを浮かせて貼り付けたら、うまくいったよ」とアイデアを付け加えた。それを聞いて、A女のグループは、紙テープをねじったアイデアを生かしながら、それらをひねって貼り付けて枝を表現することができた。

⑥第7時

できあがった作品は、まず工作室に並べ、保護者も交えて鑑賞会を行ったあと、学校敷地内にある、天神森美術館に運んで美術展を開いた。鑑賞会では、子どもが仲間の作品の色や素材の生かし方の工夫に多く気づくことができた。



鑑賞活動で思いを話す（左）



グループでアイデアを練る（右）



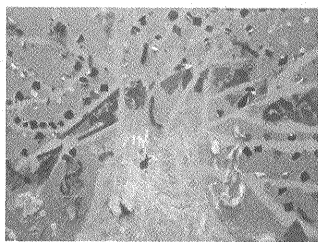
第2時 実際に木に触れてイメージをふくらます（左）



第3、4時 イメージに合う絵の具の使い方を工夫する（右）



第5時 表し方を全体に相談する（左）



児童作品より（右）

(3) 実践を通して

「感じることを大切にし、鑑賞活動と表現活動をつなぐ授業創造を目指したとき、小学校3年生に、「生

命」をテーマにクリムトの作品の対話型鑑賞を行い、イメージをもたせて共同製作をするという展開は、少々難易度が高く、冒険であると感じていた。しかし、1学期にゴッホの作品を対象に、クラスの子どもに初めて対話型鑑賞を体験させたとき、子どもが、大人の思いもよらないイメージをいっぱいにふくらませながら絵を鑑賞していたことに驚いた。その姿を見て、やはり小学校3年生なりの「生命」観に挑戦してみたいと思えた。

対話型鑑賞を導入段階でじっくり行い、書き表すことや話し合うことなど、言語を用いて仲間とかかわり合いながらイメージをもたせたり、アドバイスし合ったりすることで、表現への追究心を高めながら活動させることができた。図画工作科を通して子どもを育てていくとき、鑑賞活動の重要性に改めて気づくこととなった。子どもは本当は「感じること」がとても得意である。教師の役目は、それを効果的に表出させる方策を打つことといえる。そのためには、教師自身も、やわらかな感性をもって子どもに対することができないなければならない。

今回、練り合いにおける山場の設定では、迷いや困っていることについて、全てのグループが話し合うことはできなかった。「ぼくも聞いてみたい」「私もアイデアがあるよ」という思いをもった子どもが多かったと思われる。練り合う山場の設定については、更に工夫が必要であると感じた。今回は、美術家の作品を対象として対話型鑑賞を行ったが、仲間の作品や身近な造形物、素材などへ対象の幅を広げたり、様々な鑑賞活動の形態を取り入れたりして、もっと「感じること」へのアプローチを行っていきたい。

3. 美術科としての「学び」

—「模型に命を吹き込む」の実践を通して—
(附属静岡中学校の授業実践と研究)

(1) 授業実践「模型に命を吹き込む」

—写真で引き出す模型がもつ形の魅力—

1) 題材について

静岡市は、世界に誇る「模型の街」である。言い換えると同市にかかわる子どもたちは、「造形の街」に暮らしていると言える。本題材では、静岡ホビースクエア等の関連施設の方と連携しながら、精巧に形作られたロボットのキャラクター模型を写真に収め、その形よさを引き出していきたいと考える。子どもたちが

学び合う場として、子どもたちが撮った写真をもとに、「どのようにしたら写真で模型のもつ形の魅力を引き出すことができるのか」に迫ることを目的とした。

題材を通して、子どもたちが模型と親しみながら、見る方向や光の加減で違った表情を見せる立体物のおもしろさを味わうとともに、静岡という土地で暮らす私たちが、深く造形と親しめる環境にあることに気づいていくことを願い本題材を設定した。

2) 授業実践

①自分の思いをもつ

授業冒頭で子どもたちに写真撮影を行うロボットアニメについて、知っていることを聞いてみた。すると、ロボットの造形については知っている子どもが多いものの、アニメ自体は見たことがない子どもが大半であった。そこで、詳しい子どもにストーリーについて知っていることを話してもらい、併せて授業者が大まかな概略を伝えた。そして、そのロボットアニメのストーリーを10分間に編集した映像を子どもたちに見せた。映像は、ロボットが活躍する場面を盛り込みながら、物語の内容をつかめるよう編集を行った。そして、当時、授業者が体験したロボットのプラモデル発売当時の熱狂ぶりを子どもたちに伝え、子どもたちに当時のプラモデルを5人に一つ行き渡るよう配付した。そして、当時のロボットの形が確認できた上で、現在のプラモデルを同様に配付した。すると、子どもたちは現在のプラモデルが発売当初のものとは違い、自由にポーズがつけられることに驚き、模型で遊び始めた。子どもたちが十分模型に触れたことを確認した上で、子どもたちに2つの模型の違いについて尋ねてみた。すると、資料1のような発言が見られた。

○資料1

- ・作りが細かくなった
 - ・色プラが使われている
 - ・スナップフィットが用いられている
 - ・部品が増えている
 - ・昔のはカクカクだが、今のはかっこいい
 - ・昔に比べて今は肩が上に上がっている
 - ・胸がスリムになっている
- など

子どもたちは、造形が細かくなっていることに素直に驚き、同時にそのプロポーションの違いにも気づいていった。子どもたちが2つの模型の違いを確認できたところで、次時にプラモデルメーカーの方に話を伺

うことを伝えた。資料2は、この時の子どもたちの感想である。子どもたちの言葉から、「かっこよく」見えるためには、何かしら要因があることに気づき、子どもたちなりの理由を考えていることがわかる。

○資料2

※以下()内はキャラクター版権の関係で言葉を置き換えた箇所

- ・旧キット(模型)と(現在の模型)を比べて、違いを探すと肩の部分のパーツが(現在の模型)は大きく、肩が一直線になっている旧キット(模型)よりも段差がある(今)の方がかっこいいと思う人が多かったです。その理由は、たぶん、肩は関節なので、関節がしっかりと丈夫で強調してあるとたくましい感じがだすからだと思います。
- ・旧キット(模型)と(現在の模型)の違いで、肩が上がっていると言っていたが、私も肩が上がっている方がかっこいいと思った。なぜなら、肩が上がっている方がいかつい感じになり、よりいっそう強く見えるからだ。

2年生の子どもたちを体育館に集め、プラモデルメーカーの方々にプラモデルの製作についてお話をいただいた。メーカーの方々は、企画、設計、パッケージデザインの担当に分かれ、子どもたちにていねいにわかりやすく伝えてくださった。特に、パッケージデザインの解説に併せて、今後の授業に役立つよう専門家の立場から、模型をかっこよくみせるポイントを伝えていただいた。講演の終わりには子どもたちの質問を受ける機会を設けてくださり、子どもたちからは、思い思いの質問がなされた。

そして、講演終了後には、内容に関連したプラモデル等の展示ブースにたくさんの子供が集まり、メーカーの方に個別で質問する姿が見られ、子どもたちの関心が高まっていることがうかがえた。講演に併せ、今後の活動として、プラモデルの写真を撮り、ホビースクエアの情報発信基地「ホビースクエア」に展示することをなげかけた。

資料3は講演を終えての子どもたちの感想である。子どもたちがメーカーの方の話を聞くことで、次時からの写真制作について、思いを深めているようすが感じられる。

○資料3

- ・写真の撮り方でどこから見ても△になるようなポーズなら、かっこよく見えると聞いて、仁王立ちがかっこよく、恐ろしく見えるのも△になっているからなのかなと思った。また、たくさんの用語が出てきて…いまいよくわからないこともあったけど、簡単な言葉に置き換えてくれたりしてありがたかったし、わかりやすかったです。
- ・正直、（ロボット）とかあまり興味はありませんでした。バンダイの方々が興味を抱かせてくれる説明をしてくださって（模型）ってすごく中身が詰まったものなんだと思いました。私も美術の時間で皆の心をつかめるような写真を撮りたいと思いました。

②問いをつくる

模型の写真撮影に移るにあたり、資料4を用意した。

○資料4

・精巧な模型	10体
・同じロボットのフィギュア	2体
・サイズの大きい模型	2体
・敵役のロボット模型	複数体
・背景用黒画用紙	複数枚
・タブレット端末	10台
・デジタルカメラ	10台
・データ処理用ノートパソコン	1台

タブレット端末はWi-Fiでつなぎ、撮った写真を事前に用意したフリーメールに送ったり、背景用の写真をインターネットから取り込んだりすることができるようにした。

撮影前に、どのような模型の写真を撮ってみたいのか子どもたちに尋ねると資料5のような意見が出された。子どもたちの意見を聞く限り、撮りたいイメージはまだ漠然としているように思われた。しかし、お互いに撮りたいイメージを語り合うことで、子どもによっては少しずつイメージが固まっていくようが見られた。

撮影の際、プラモデルのパーツが無くならないための注意点と撮った画像の保存方法を確認した上で、撮影を始めた。すると子どもたちは、美術室の外に模型を持ち出したり、ひたすら模型にポーズを取らせて自分の撮りたいイメージを探ったりするなど、様々なあらわれが見られた。資料6は最初の撮影が終わった後

○資料5

- ・見上げた写真
- ・武器をもった写真
- ・アニメのワンシーンを再現した写真
- ・爆破された（ロボット）の写真
- ・戦闘後、ほっとした雰囲気の写真
- ・人間とのコラボレーションした写真 など

の子どもたちの感想である。子どもたちが自分のイメージ通りの写真を撮るために、撮る方向、光、背景の工夫が必要であることに気づいていることがわかる。これは授業者の想定よりも早いものであった。この子どもたちの実態を考えると、本来、次時にはお互いの写真を見合う場面を設定する必要があったのかもしれない。しかし、子どもたちの大半が、自分のイメージ通りの写真が撮れていないことをふまえ、次時も撮影の時間を確保することにした。



デジタルカメラで模型の写真を撮る様子

前回の授業を終えて子どもたちのイメージ通りの写真にするために「光（影）」が必要であるという言葉を受けてスポットライトを用意した。

自分のイメージに合う背景を自ら用意して持ってくる

○資料6

- ・今日は（模型）の写真の撮り方について追求しました。カメラでただ真正面から撮るのもいいと思うけれど、少し斜めに傾けたり、撮る方向を変えたりすることで、立体感があふれると思いました。また注目させたい部分（顔や武器）に光を合わせるとその部分だけはっきりとしてよいと思いました。私は戦闘後のやりきった感じを夕焼けの背景でやろうと思っているけれど、まだまだ考え中です。グラデーションの背景でも試してみたいです。

る子どもや自分で製作したプラモデルを持ってくる子どもが見られ、イメージ通りの写真を撮りたいと強く考えている子どもがいることが確認できた。

資料7は2回目の撮影を終えての子どもの感想である。2回目の活動の中で、自分の納得のいく写真を撮ることができた子どもがあらわれていることがわかる。そして、写真を撮る中で、自然とチームができあがり、チーム内でお互いに学び合っているようすが見て取れた。

○資料7

- ・自分が納得できるポーズをとらせるのにだいぶ苦労しましたが、なんとか1枚撮ることができました。そして、その写真に合った加工もでき、納得のいく写真になったと思います。しかし、まだ1時間ほどあるので、もう少し視野を広げて写真を撮っていきたいです。
- ・一緒にやっている人たちはすごくガンダムを撮るとき工夫をしていた。一緒にやっていると勉強になった。今回は撮りたかったものを撮れたから、次回は一緒にやる人たちの協力をしたい。

授業冒頭で次時に中間発表会を行うことを全体で確認した。前時の感想から、既に納得のいく作品ができあがっている子どもがいることがわかっていたので、そうした子どもたちには、製作の遅れている子どもの補助を行ってもらうよう伝えた。資料8はこのことに関する子どもの感想である。

共に製作をすることで、アドバイスをする機会を特別に設けなくとも、子どもたち同士で刺激を受けながら、かかわりあっていることがわかる。そして、そうしたかかわりが「自分なりの表現」に迫らせているように思われる。

また、これまでの製作を通して自分がどのようなイ

○資料8

- ・(ロボット)が飛び出してくるような感じにしたかったけれど(ロボット)の体型が寝ているだけにしか見えなかったりして、少し苦戦した。けど友達に協力してもらったら、イメージと合うのができました。けどもう少しいいものができる気がする。
- ・今日は、ガ(ロボット)の写真を見つけられてよかったです。私はAさんの手伝いをしていました。今回はAの方がなんか立体感があっていいと思いました。私もがんばりたいです。

メージを表現したいのか、文章で表すようワークシートを配付しました。資料9はこのことに関する子どもの感想である。

○資料9

- ・これまでなかなか言葉にできなかった「どんな写真にしたいか」の答え。改めて写真を見てみて、僕は切羽詰まった戦闘でのガンダムの輝きを表現したかったんだと思った。今回の写真作りは、その題材を聞いて直感的に思いついたものだから、言葉に表せなくとも、自分が納得できる写真を撮れたと思う。

この子どもは前時自分が納得のいく写真が撮れたと感想を残していた。その上で、改めて自分が何を表したかったのか考える事でより明確に自分の表したかったものを確認できていることがわかる。同時に、視覚的なイメージを言葉で表現することの難しさを訴えているようにも思われる。同じような感想に次のようなものもあった。

視覚的なコミュニケーションが主になる「美術」という教科の中で、「言葉」の扱いは難しいだろう。しかし、同時に言葉で表現することで、よりそのイメージが明確になっていくことも先の子ども言葉から感じられる。

資料10は、中間発表会を控えた子どもの感想である。

偶然、タブレット端末内に残された他クラスの写真や中間発表に向けて写真を整理するために掲示された仲間の写真を目にする機会があり、そこで、子どもがそれぞれの作品を制作の立場から評価していることがわかる。同じ目的で制作されている写真を見ることで、自然と作品の意図を読みとることができ、次回の中間発表会に期待しているのではないかと考える。

○資料10

- ・(ロボット)をカッコよく撮るのは、とても大変だと改めて思った。Ipadに入っていた写真を見たけど、ライトをうまく使って(ロボット)の影をいい感じに映し出されていて上手だと感じた。次回は中間発表会だけど、みんなの写真を見るのが楽しみ。
- ・(前略)他の人が作った写真を見ていると、武器を持っていたり、空を飛んでいたりとたくさん工夫されていました。(模型)を糸で吊して撮っている人がいたけれども、(模型)が動いてしまって撮るのがきつと難しいだろうと思いました。夕焼けの光がとても明るかったの

で、私は今回照明を使わなかったけれど、照明を使った作品もよい作品となっていました。これから中間発表会で見ていくみんなの作品も楽しみです。

③自分なりの表現を追求する

中間発表会では、子どもたちの作品がよりよい作品（自分の意図により迫った作品）になるための方向性を子どもたち自らが見つけ出していくことを大切にしました。しかし、作品が写真であることから、そのポイントとなる点は、撮る方向、構図、ライティング、背景と読み、そうした違いに気づきやすいよう子どもたちの作品を配置した資料を用意した。また、子どもたちの話題にしたものを全体で共有するためモニターに提示できるよう視聴覚機材を準備した。

キャラクターを主題とした写真であるため、その構成要素は幅広く、結論めいたものを導き出すことはなかったが、子どもたちそれぞれがもつ課題解決に向けての方向性は見つけ出すことができたようである。またアニメが好きな子どもから「横向きのキャラを配置するならば3分割構図が天板である」などといった発言も見られ、日常生活に生かせるものも話題に挙がった。さらに、「キャラクターの手の向きに配慮した方がよい」や「関係の無いものの映り込みは絶対に避けるべきだ」などといった多くの写真家が画面作りに際し、こだわっているであろうことに子どもたち自身が気づいていく場面も見られた。

④美術や自分と向き合う

中間発表会を経て、子どもたち自らが納得した作品が撮れたところで、作品に題名をつけてもらうことにした。題をつけることによって写真の見方が決まってしまうことから子どもたちなりに、悩みながらつけているようすがうかがえた。作品が出そろったところで、「ホビースクエア」での作品展示を行い、一般の方にも子どもたちの作品を見ていただく機会を設けた。作品展に際し、静岡大学の芳賀先生と川原崎先生のご協力を仰ぎ、教育学部美術科の大学生による作品との合同作品展としていただき、またその展示に多分のご尽力をいただいた。

作品展が開催されてから、今回の題材に携わった2年生全員で作品展の会場に行き、鑑賞を行った。子どもたちは自らの作品はもちろんとして、仲間や大学生の作品一つ一つに対し、熱心に鑑賞しているようすが見られた。資料11は鑑賞を行った子どもの感想である。

資料11

- ・大学生と中学生、また男子と女子が撮った写真では（ロボット）の魅力の引き出し方がちがうと感じました。あとポーズによって、背景との合い具合が変わってきて、題名が変わってくると思いました。
- ・自分達が撮った写真があのよう展示されているのを見ると、うれしいし感動しました。また、自分達のクラスだけでなく他のクラスの分や、大学生の作品を見れたので自分には思い浮かばなかったアイデアも知ることができ、考えの幅が広がりました。

(3) 実践通して見えてきたこと

今回題材を行っていく中で、改めて美術表現の授業において、子ども自身が表現したいものを持っていることの重要性を感じた。そのために題材自体を子どもの目線から考え、子どもが自らのイメージをもちやすいものを選定していくことが大切である。そして、題材を子どもたちになげる際には、子どもたちが表現したいイメージをもちやすいよう配慮し、授業を構成していく必要がある。当然、それでも子どもたち全員がイメージをもてることは希であろうから、イメージをもてない子どもに自身のイメージが生まれてくるようにいねいにかかわっていく必要があることもわかってきた。また、自らの表現と他との表現の違いに授業の焦点を当てていくことで子どもたちの美術がもつさまざまな造形要素についての学びが深まっていくことも同様に分かってきた。やはり、美術科という「教科」である以上、単に表現に対し心情的な読み取りで終わるのではなく、造形要素と深く結びつけていくことが、一般的にわかりにくいとされる美術科が確かな学びを行っていることの実証につながっていくのではないだろうか。

また、子どもたちの表現手段として「写真」を選んだみだが、写真機器と通信網の融合が進んでいることや情報機器との親和性を強く感じることから、今後の大きな可能性を感じた。実際忙しく日々が過ぎていくことをふまえると、新たな分野を授業で扱うことは難しいことのように思われるが、新たな実践を積み重ねていくことがよりよい授業を生み出していきつかけになるとも言え、今後に生かしていきたいと思う。

○資料 12

・今回の（ロボット）の写真は、主に「かっこいい」を意識したものだったと思う。その中でも「かっこいい」（ロボット）の表現の仕方は人それぞれなんだと改めて感じた。みんなが自分なりの「かっこいい」を追求していて個性豊かだった。だから言うまでもないが、今回の授業はとても楽しかった。これまでの授業を通して、確実に分かったことは、「最高の作品」は自分では作れないということ。仮に、瞬間的に自分の写真に納得したとしても、いざ他の写真と見比べてみると、自分に欠けている点もあり、なかなか自分で納得して終わることができない。今回もそうだった。そういうこともあり、自分に厳しくなってしまうがちでもあるが、それとは別に、「相手を魅了する」という要素も関わってくる。魅了させるためには、臨場感を出す、緊張間を出す、ユーモアを十二分に出すなど自分なりの考えがあると思う。だから結局は、自分が思い描く写真を忠実に再現することが、自分で納得できる作品にするコツなのではないかと考えた。

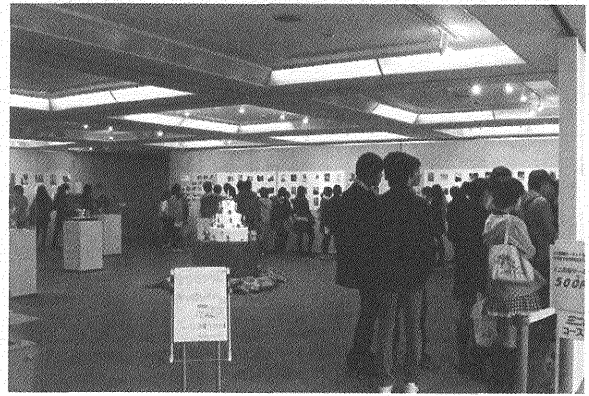
(4) おわりに

著作権の関係から非常にわかりにくい実践発表となっ
てしまい、大変、申し訳なく思う。しかし、そうした
扱いにくい題材であるにもかかわらず、実際に授業を
行う際には、メーカーや施設の協力を得ながら、思う
ように授業を行えた経験は貴重なものになったと思う。
また、こうした思い切った授業を大学の協力を得なが
ら行える大学附属校の環境にも非常に感謝している。

授業を行いながら、徐々にワクワクしている自分に
気がついた。やはり、美術という芸術科目である以上、
子どもたちが多かれ少なかれ「感動」することが授業
を構成するうえでの大前提なのではないかと同時に思
う次第である。



授業風景



展示風景



鑑賞風景

4. 附属学校の授業実践と研究（平成 26 年度）

壁画に込められた人々の思い

ーラスコー洞窟壁画の鑑賞ー

人々が狩猟生活を送っていた約 17,000 年前、ラスコ
ー洞窟壁画は描かれた。本題材では、ラスコー洞窟壁
画の鑑賞行い、壁画を前にした古代の人々の会話をグ
ループで考えていく。会話を考えるためには、「なぜ壁
画は描かれたのか」という問いに対して、自分たちな
りの答えを探さなくてはならない。

人間は、なぜ表現するのか？ 人が生きることと美
術との関係について、改めて考えてみた。



授業風景

5. おわりに

2004年3月、『図工・美術授業研究 FILE 一連携と創造』というタイトル名で刊行し、大学の研究や各附属校との共同研究の成果を示してきた。長く続けてきた結果として、公立学校の多様な実践も紹介し、今日の美術教育が抱える様々な課題への取組みや成果を示すことができた。互いが児童生徒の可能性を引き出すため、教員としての資質・力量を高めるための授業改善に努めてきたが、数多くの実践研究を紹介してきた『図工・美術授業研究 FILE』は、美術教育実践研究の交流の場及び情報発信の場を担い、大きな成果を残してきたと考えている。

昨年度の『FILE』において、造形遊びと対話の相互関係を追求した実践、対話型鑑賞から表現活動へと発展させた実践、作家の制作風景の鑑賞を取り入れた表現をさらに鑑賞で深めていく実践、自己肯定観や自己啓発といった自分と向き合い、自分らしさを追求する実践、対話で育む豊かな造形感覚の育成をめざした実践、芸術家が伝えなかったものを自己の感性で捉え表現していく実践、地域の素材から写真というメディアで自己の表現を追求していく実践など、まさに今日の美術教育実践の課題について取り上げながら、表現および鑑賞に関する具体的な方法や内容について検証している。

現在、『図工・美術授業研究 FILE』も第二ステージに突入したといえよう。附属や地域の図工美術教員の協力を得て、実践事例を多く取り入れ、教育現場の視点から作成してきたこの『FILE』シリーズ。それを今後も継続し、発展させ、大学や附属校、公立学校の研究成果を踏まえながら、これからもさらに地域の美術教育の活性化に向けて、その可能性を探っていきたい。